

祇園の櫻

熊谷九寿

制作年：1985(昭和60)年

サイズ：31.8×41.0cm

材質：油彩、カンヴァス

所蔵：中津市木村記念美術館

1993(平成5)年中津市に寄贈される。



月の光の下、満開の花をつけた桜の木が浮かび上がっています。臙げに姿を見せる花は、盛りの豊麗さと束の間の命のはかなさをも感じさせます。

熊谷は特に昭和52(1977)年の個展開催頃から桜を題材とした絵画を多く制作し、晩年まで描きつづけました。その中には夜桜も少なくなく、特に月夜に浮かぶ夜桜を描く事を好みました。中津市所蔵のものではありませんが、同じく月夜の桜を描いた作品に、次のような言葉が寄せられています。「色が消えようとする、そのはざまの明暗のたゆたうさなかに、ほんのりと浮かび上がる梅や桜の花の色に心をひかれるのは、日本の陰翳を愛する感覚の細やかさによるのだろう。

そうした日本人の感覚の血脈を、熊谷氏は、人一倍大切にしている稀少な画家の一人であるように私には思われる。だが、じつは、この絵はそうした感覚の嘆美に終始しているのではないことは明らかである。そうした感覚の陶醉をかかえこみながら、いや、その沈静を華やかさを咲き出させているものの根元の正態をこそ、熊谷さんは描きたかったにちがいない。

大地に大きく根を張っている老樹の、うつ然たる姿形に、画家は自分の生きるしるしを仮托したでもあろう。世阿弥のいう”老年の花”を、ここに探り見ることもできそうである。(中略)このようにして、いわば”硬質の詩情”が生まれ出ることになるのである。」(三宅正太郎「硬質の詩情 「夜桜」熊谷九寿作」 三彩273号、昭和46(1971)年)光と影、咲き誇り散っていく花々の美しさに心をふるわせる日本人の細やかな感覚と、老成していく人間の人生への共感が一体となって、夜桜はこの世に生きる人々そのものの化身となっているようです。